

令和2年度 第2回  
北海道立総合博物館協議会

議事録

日時：令和3年2月19日（金） 10時00分開会

場所：北海道博物館 講堂

令和2年度 第2回北海道立総合博物館協議会議事録

会議名	令和2年度 第2回北海道立総合博物館協議会
開催日時	令和3年2月19日(金) 10時00分～12時15分
開催場所	北海道博物館 講堂
出席者	<p><b>【委員】</b>            大原昌宏委員(会長)、中村吉雄委員(副会長)、児島恭子委員、佐々木史郎委員、住吉徳文委員、中川充子委員、湯浅万紀子委員            以上7名出席</p> <p><b>【事務局】</b>            矢嶋裕一文化振興課総括主査、小島圭介アイヌ政策課主幹、石森秀三北海道博物館長 ほか</p>
傍聴者	0名
議 題	(1) アイヌ民族文化研究センター専門部会の延期について(報告) (2) 令和2年度北海道博物館事業経過報告 (3) 令和3年度北海道博物館年度計画(素案)について (4) 第2期中期目標・計画期における協議会の役割(案)について (5) その他

※・単なる相づち及び言い直しなどは、原則として割愛する。

・内容に応じて《意見・提案》、《質疑応答》等の見出しを便宜的に作成した。

## 1 開会

池田学芸主幹：ただいまから令和2年度第2回北海道立総合博物館協議会を開催いたします。それでは、開会にあたり、北海道博物館 館長の石森より、ご挨拶申し上げます。

## 2 館長あいさつ

石森館長：おはようございます。本日は、お忙しい中、また足元が悪い中お越しいただき本当にありがとうございます。（以下、あいさつ）

### 《配付資料の確認》

池田学芸主幹：続きまして、配布資料の確認をさせていただきます。  
（以下、配布資料について説明）

池田学芸主幹：新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、室内の換気を行うため、開始から概ね1時間を目処に、休憩のご提案をさせていただきます。よろしく願いいたします。

### 《出席状況の確認》

池田学芸主幹：まず、本日の出席状況についてご報告いたします。本日の協議会には、定員7名中7名の委員にご出席いただいております。北海道立総合博物館条例第25条第2項にあります、協議会開催の条件である委員総数の2分の1以上の出席を満たしており、本協議会が成立しておりますことを、ご報告いたします。

## 3 北海道立総合博物館協議会委員紹介

池田学芸主幹：本日ご出席いただいております委員の皆様のご紹介をさせていただきます。  
（以下、名簿に沿って協議会委員を紹介）

池田学芸主幹：続きまして、北海道環境生活部の職員を紹介させていただきます。  
（以下、名簿に沿って本庁出席者を紹介）

池田学芸主幹：続きまして、北海道博物館の職員を紹介させていただきます。  
（以下、名簿に沿って博物館出席者を紹介）

### 《協議会の公開》

池田学芸主幹：本日の協議会は、道の情報公開条例の規定により非公開に該当する要件はございませんので、公開の取り扱いとさせていただきます。  
それではこの後の議事進行につきましては、大原会長をお願いいたします。

### 《会長あいさつ》

大原会長：おはようございます。開催にあたりまして一言ご挨拶をさせていただきたいと思えます。コロナで皆さん大変な時にご出席いただきありがとうございます。コロナでミュージアム業界も疲れてきている状態になって、なかなか入館者数も上がらないなど、いろいろなことがあります。北海道博物館におかれましては特別企画展やおうちミュージアムなど新しい取り組みを活発にされていて、私がいる北大総合博物館も頑張らないといけないと思っている次第です。

今日は5つの議題があり、議題（1）（2）で2つ報告をしていただいた後、議題（3）（4）で令和3年度以降の計画についてご議論していただくということが一つ。もう一つが令

和2年～6年の第2期目の中期目標・計画期の協議会の役割を議論していただくということですので。実は私たちは第3期の協議会の委員であり、今回の協議会が最後の集まりだと伺っています。令和元年度までの外部評価をさせていただいた時に、博物館と協議会のあり方をお話しいたしましたので、次の第4期の委員と博物館のあり方を第3期の委員として議論していただきます。そして第4期の委員の方々にそのあり方の状態で受け継いでいただく、ということで今日は議論していくこととなります。

来年度の計画と、協議会のあり方についてご議論いただくこととなりますので、よろしくお願い致します。議事の円滑な進行についてもご協力をお願いいたします。簡単ですが、ご挨拶といたします。

それでは、ただいま説明させていただきましたが、本日の議題は、お手元の次第にありますように、(1)から(5)までございます。協議会の終了時間は概ね12時を予定しておりますので、よろしくお願い致します。

#### 4 議題

##### 議題(1) アイヌ民族文化研究センター専門部会の延期について(報告)

大原会長：それでは、最初の議題に入ります。議題(1)「アイヌ民族文化研究センター専門部会の延期について」につきまして、説明をお願いします。

小川学芸副館長：アイヌ民族文化研究センター長の小川でございます。議題(1)「アイヌ民族文化研究センター専門部会の延期について」につきまして、ご報告させていただきます。

(以下、口頭で説明)

大原会長：ご説明ありがとうございます。ただいまの説明につき、ご質問等ございますか。(質疑応答なし)

##### 議題(2) 令和2年度北海道博物館事業経過報告

大原会長：それでは、次の議題に入ります。議題(2)「令和2年度北海道博物館事業経過報告」につきまして、説明をお願いします。

堀学芸部長：学芸部長の堀でございます。議題(2)「令和2年度北海道博物館事業経過報告」につきまして、今年の10月から現在までの博物館の動きについて、簡単にご報告いたします。

(以下、口頭で説明)

大原会長：ただいまの説明につき、ご質問等ございましたら、お願いいたします。(質疑応答なし)

##### 議題(3) 令和3年度北海道博物館年度計画(素案)について

大原会長：それでは、次の議題に入ります。議題(3)「令和3年度北海道博物館年度計画(素案)」につきまして、説明をお願いします。

川田総務部長：総務部長の川田でございます。「令和3年度北海道博物館年度計画(素案)」のご説明に先立ちまして、私の方から、来年度予算の概要と、来年度からの博物館組織機構の一部改正について、まずご説明させていただきます。

(要覧2019のpp.114-116を参考に予算について説明)

(要覧2019のp.111をもとに現在の組織体制について説明)

(資料2のp.4をもとに来年度の組織体制について説明)

それでは、「令和3年度北海道博物館年度計画(素案)」について池田学芸主幹からご説明いたします。

池田学芸主幹：総務部企画グループ学芸主幹の池田でございます。令和3年度年度計画(素案)について、私の方からご説明いたします。

(資料2をもとに説明)

**大原会長：**ご説明ありがとうございました。来年度の年度計画にこれまでの外部評価を真摯に反映していただいたと思います。多岐に渡りますので項目をくぎりながらご質問をお受けいたします。

まずは、予算と組織体制について何かご質問ございますか。

#### 《質疑応答1》来年度予算と組織機構案について

**佐々木委員：**一点だけ、組織体制についてです。研究戦略グループを作られるわけですが、以前は社会貢献グループがあったと思います。社会貢献グループを研究戦略グループに転向する意図や目標をご説明いただきたいです。

**小川学芸副館長：**社会貢献グループが研究戦略グループに転向するというではありません。社会貢献グループは対外的な貢献と研究成果の発信を担当していました。一方で、調査研究の計画を立てる部分は博物館基盤グループにあり、この博物館における調査研究部分については、計画を立てるところは博物館基盤グループが行い、成果発信は社会貢献グループが担当することになっていました。しかし、実際動いてみると仕事の重複や分離があったので、社会貢献グループの中の成果発信部分と、博物館基盤グループの中の研究計画の部分を統合し、研究の計画から成果発信を一貫して一つのグループが管理するというかたちにしたということです。

**大原会長：**予算面について、今年度に比べて、来年度は予算案上増えるのか減るのか、そのあたりはどのようなのでしょうか。

**川田総務部長：**経常的な経費については、予算のシーリングで減っている部分はありますが、その中で、経常経費とは別に道の重点政策予算を用いて、特別展の予算確保や、構想実現のための取り組みなど、総体としての予算確保に取り組んでいます。

**大原会長：**ありがとうございました。気になったのはシーリングの部分です。私たちの大学も20年間シーリングを続けてきて、1%のシーリングが続いたら2割近く減ることになり、ほとんどの研究室が疲弊している状態です。資料2の来年度の計画は重点計画と一般計画に分けていただいておりますが、一般計画のところは、競争的重点化はそぐわないところだと思っております。シーリングが続くことで全く研究や出張ができないという状況を起こさないことが、予算面で大切かと思っております。予算確保の上では重点計画はとても良いと思いますが、基盤がなくなるというのは全ての博物館、研究所といったところで起こっていますので、その点が心配になったところです。

**川田総務部長：**その点について補足すると、シーリングで減ってきた部分はこれまでもありました。旧開拓記念館の頃にはかなり減っていましたので、北海道博物館の開館に合わせて予算増額に取り組んでいます。シーリングがかかったとしても調査研究部門など減らすことができない項目もあります。そこを確保することで別なところにしわ寄せがいく部分もありますが、シーリングがずっと続くと限りなくゼロに近づいてしまいますので、そのようなことがないように、その時その時で予算要求の枠を確保しないといけないと考えているところです。

**大原会長：**館員の方々は言いづらい部分もあるかもしれませんが、私たち協議会のところで研究面の予算等を強く言うのが大切かと思うところです。

**中村副会長：**1点だけ。今回、樺太連盟が解散するというので、貴重な資料を整理して、樺太の歴史を道民に伝えていくというように、貴重な資料を取り扱っていただきたいです。そして1920年の道南であったイオマンテの歴史を博物館が保存していて、今年の秋に道南で初めて行うアイヌ文化祭のところで、研究職員の大坂さんやセンター長の小川さんによって、貴重な資料を活用して道南地方のアイヌ文化を発信していくということに感謝しています。アイヌ協会の副理事長の立場として、初めて道南で催されることについて、当時の資料と現代とを組み合わせる新たなアイヌ文化の発展につなげていただいたことに本当に感謝しています。ありがと

うございました。

**大原会長：**予算と組織体制については他にございませんか。グループの責任所在をきちんとするために組織変更をしていただいたということで、私たちが外部評価でガバナンスのことを話していましたが、かなりわかりやすくなったと感じております。

**大原会長：**重点計画や、形式について何かございませんでしょうか。

**大原会長：**特別展等の展示に関することについてはいかがでしょうか。

### 《質疑応答2》ICTを活用した教育普及事業について

**大原会長：**教育普及行事についてはいかがでしょうか。

**中川委員：**直接的には教育普及行事とは違うかもしれませんが、おうちミュージアムはコロナの状況の中で非常に素晴らしい取り組みだったと思います。ICTを活用した、北海道やそれ以外の地域への子供たちへの教育事業をぜひ拡大していただきたいと思っています。お金や技術の課題はありますが、環境は整ってきていると思います。GIGAスクール構想という、学校にいる子どもたちがタブレットを与えられたり、通信環境が整えられたりなど、新型コロナの関係でそのスピードが早まっていると聞いています。とくに地方の子供たちや教育委員会が熱心に取り組んでいるということも聞いていますので、ぜひそのコンテンツとして北海道博物館の蓄積を活用いただければと思います。

とくに、恐竜展がはじまって、道新電子版の動画サイトにおいて「道内の恐竜7種が大集合 北海道博物館で企画展」という動画が先週のアクセスランキングで3位になっており、関心が高くなっております。ただし、こういった状況でなかなか見に来られなかったり、予約が取れなかったりなどあると思いますので、ICTを活用して、ぜひ子供たちが恐竜の実態を知れるようなことを考えていただければと思います。

**堀学芸部長：**ありがとうございます。恐竜展に関しましては、コロナ禍なので、いつどういう状況になるかわからないということで、一般のお客さんが入れない状況もあるかもしれませんし、人数制限によって枠に入れない方々がいることを考慮して、ICTで公開できる仕組みを検討しているところです。一つはMatterportという360度見ることができる画像配信を考えています。もう一つは展示の中身を知っていただきたいということで、北大総合博物館の小林快次先生にご協力をいただき、映像を撮って動画で配信することも計画しています。

**大原会長：**ありがとうございます。コロナ禍によってICTは5年進んだと言われております。これまでは、とくに札幌周辺の方々が北海道博物館の恩恵を受けていたというのが、ある意味では、この何年かはICTを活用して道内広くにという発想になるかもしれません。一度発達すると元には戻れないので、これからはICTを絡めないという展示ができないという世界になるのかなとも思います。

北大総合博物館で、受付に恐竜展の予約して来たのですが、という方がいて、ここじゃなかったのかと愕然と崩れ落ちることがありますので、お互いに宣伝していかないといけませんね。

**湯浅委員：**ICTに関して、発信するだけでなくコンテンツをアーカイブしていくことが重要ですので、留意していただければと思います。

### 《質疑応答3》令和3年度年度計画（素案）について

**湯浅委員：**次の議題かもしれませんが、説明の中にあつた健康値という概念を取り入れることに非常に期待しております。それを定めて計画に盛り込んだのか、評価に持っていくのか、このあたりをご説明いただければと思います。

**池田学芸主幹：**次の議題でご説明いたします。

**大原会長：**コレクションの方は、コレクションヘルスインドックスといものがあり、どれくらいの健康な状態で管理されているかというものはよくありますが、ミュージアムのヘルスインドックスはまだ一般化されていないので興味深く思います。

資料2の21ページの道民参加の推進というお話もありました。これは宇佐美委員（第3期北海道立総合博物館協議会委員、令和2年5月26日付けで退任）がお話ししていた部分がきちんと反映されて、新たな形になっております。あとは、北海道博物館の各種活動に共同参画し、かつ館長の諮問に答える支援組織を作ること、ということが強く謳われているということですね。

資料2の22ページの博物館ネットワークについては、今年の11月17日から18日に、札幌会場で全国博物館大会（公益財団法人日本博物館協会主催）が開かれるということで、北海道の拠点博物館としての、ネットワークの中心としての役割を、今年の大きな事業として果たされるというご説明がありました。

このほか全体を通して何かご質問ご意見ありましたらお願いいたします。

**佐々木委員：**細かいところですが、資料2の16ページのミュージアムエデュケーター機能の強化というところについて。用語の問題ですが、ミュージアムエデュケーターであると博物館教育を行う人ということになってしまいます。人の強化なのか、ミュージアムエデュケーション機能の強化なのか。

**池田学芸主幹：**ミュージアムエデュケーター機能の用語については、〈人〉か〈こと〉か、という面で当然のご指摘をいただいたかと思えます。北海道博物館のリニューアルに関わる事前構想から生き続けている言葉が「ミュージアムエデュケーター機能」であり、それが踏襲されてしまったということです。ただし、現実として我々がやっていることは、ミュージアムエデュケーション機能を強化していきたいということですので、用語を含め検討課題とさせていただければと思います。実際に我々がめざしているのは、エデュケーターとなると当館では学芸職員がいて、解説員がいて、という構造になっていたり、さらに会計年度任用職員が案内業務に加わったりしており、このあたりの用語について整理する必要があります。その中で、エデュケーターは誰か、エデュケーションはどういう分担でやっていくのかということになってきます。現在はこれらが未整理のままの計画になっていますので、精査させていただきます。

**大原会長：**学芸員は法律などで決まっていますが、カタカナを用いている博物館学の用語は全然整理されていないのかなと思いました。むしろ新規性を出すためにカタカナで作ってしまって混乱してしまっているのかもしれない。

**住吉委員：**確認ですが、コロナ禍が続いている状況の中で、今後状況が改善していく前提で来年度の計画を見込まれているのか。あるいは今の状況が続く中できちんと推進していくと見込んで計画を立てているのか。というのは、状況が改善するだろうと見込んでいると、また状況の変化によって、ICTの活用などやり方は学んできているのですが、中止をします、できませんでした、ということは起こりうることです。その辺り、どのくらい覚悟を持って計画を立てているのかをお伺いしたいと思いました。

**池田学芸主幹：**基本的には、計画を作るにあたって通常に戻ることを想定して作っています。この1年間は中止ないし延期、あるいは縮小の嵐でした。このような中止とか延期とかの判断は、状況の変化の中、その都度苦渋の決断をしてきました。決断には力があるのですが、それをお客様に周知することについては、この一年で慣れてきた面もあり、お客さんのご理解もあって、ほとんど齟齬もなくできていました。今回の恐竜展のオンライン予約制や、大原会長との事前協議もオンラインで行ってきましたが、博物館として物足りなさも感じているところですね。当館は五感に訴える、ふれあいの博物館をめざしていたのに、はっけん広場の閉鎖などもあり、物足りない部分もあります。展示会の性質によってはICT技術だけではどうなのか、ということもあり、世界が健全になることを基準にして、事業自体はこれまでの積み重ね、プラ

スアルファでまずは見立てているというのが、私たちの方向性と言えるかもしれません。

**住吉委員：**ありがとうございます。状況が改善することを見込んで積極的な計画を立てているということで理解しました。企業などもそうですが、コロナだから仕方ないという風潮が当たり前になると、それがエクスキューズになってしまい、どんどん後退してしまうことが危惧されているところです。一方で、北海道博物館は公的機関ですので、先陣を切って尖ったことはできないかもしれませんが、北海道博物館の動きは北海道内の博物館や見学施設等のベンチマークになっていると思います。博物館としての本来の機能や役割を、苦しい状況の中でもギリギリのところでやっていっているということを見せていただくと、他の博物館や見学施設の励みにもなりますし、それをめざして活動できるようにもなります。この状況が続いていくと、人と接することとか、何かを開くこととかはやらなくてもいいよね、という風潮になってしまうのが怖いということが、確認させていただいた根底にあります。

**大原会長：**ありがとうございます。プランAだけでなくプランBを作るというのは、労力や予算の組み換えの苦労もあるかと思いますが、そういう時代になってきたのかもしれない。つまり、プランBへの戦略的な切り替えなど、そういうものを常に持っていないと、あまり尖れないということもあるかもしれません。

**児島委員：**情報の発信とかソーシャルディスタンスなど、やり方についてはいいのですが、根本的に博物館の役割について、この状況を経験してお考えになることがあるのかな、ということをお伺いしたいです。子供たちへの教育についての発言もありましたが、そのような博物館の役割について考えていく予定、計画はどんなものでしょうか。

また、予算についてですが、この状況でも持ち越してしまったりできなかつたりしたことは、これからの目標に入っているのか。例えば、調査や出張などができずに使えなかった予算は持ち越せないのでしょうか。それが来年度にあるかもしれないとした場合の、プランBのようなものはどうなっているのかと思いました。

今回のこれ（資料2の令和3年度年度計画）は素案ということですが、細かいことかもしれませんが、（中期目標・計画の）【ア】【イ】【ウ】があって、（年度計画の）具体的な【ア】【ア】【イ】【イ】に対応しているというのはよくわかりました。ここでいう【ア】【ア】【ア】は場所によって違うかもしれませんが、最初の【ア】から次の【ア】に段階的に事業を行っていくという意味でしょうか。それとも、事業として並行してやっていくことが多いと思いますので、段階的に順番があるわけではないということですか。

**石森館長：**重要な指摘でしたので休憩を挟んで、一呼吸おいてからお答えしたいと思います。

**大原会長：**それでは一時休憩を挟んでからお答えいただきたいと思います。

《休憩》

《再開》

**石森館長：**児島委員から大きく3つのご指摘をいただきました。まず、一番大きな問題はこれからの博物館の役割を考える機会ではないかということでした。これはご指摘の通りでして、私個人といたしましても、コロナに合わせて、博物館そのもののあり方が大きく変わっているということも感じておりますし、北海道博物館の役割もありますし、館員一人一人がモヤモヤしていることも事実でございます。小川学芸副館長が正面玄関で受付対応をするということも、現実なものですから、本当は館員会議を開いて議論してということもすべきですが、その余裕もなく、目の前で一つ一つやるべきことをやっているという状況です。現実には一人一人が今後どうあるべきか、ということを考えるべきで、委員の先生方からもさまざまな形でご指摘いただいているところです。しかし、部分的には手掛けられていますが、全体として北海道博物



館の役割として今後どういった点を強化していくか、修正していくかなど、ご指摘の通りですがなかなか踏み込みづらいところです。館長としてこの機会に考え直すべきではないか、問題だらけではないかと言いたいところですが、それを言うことで、また館員を苦しめてしまうかもしれないということが偽らざるところでございます。児島委員のご指摘の通り、何か良いタイミングでそのように進めていければと考えております。残る2つについては別の者からお答えいたします。

**小川学芸副館長：**事業についてはコロナの影響でできなかったことがたくさんあります。出張を伴う調査や、広く集まって行う会議やシンポジウムあるいは研修会といったようなものでできなかったことはたくさんございました。予算を使いたかったができなかったことだけでなく、道全体でコロナ対策に取り組んでいたため、年に数回不要額があれば出すようにという要求があり、当館からも差し出した部分もあります。どういう風にそれを取り返していくか、やり方を考えながら作っていくか、ということがございます。例えば、集まったの研修会が難しければ、リモートでできるものであればリモートで行うとか、集まり方の工夫でやっていく、など事業の組み直しを博物館として、あるいは調査研究を担っている職員のところで考えていく必要があるのかと思います。先ほどの説明の中でも、展示会のいくつかを中止、もしくは延期したのもありまして、それぞれの担当職員の方で今年度ダメだったとしても、来年度再来年度など1年ないし2年延期して開催するというのを、それぞれに検討して計画の練り直しをしています。それに伴って予算について、今年できなかったことを来年度に、ということは道の制度上できないので、他の部分とのやりくりの中で工夫していくのが中心になるかと思いません。ただ、樺太の記憶継承事業については、道の予算の中で基金として組んでいるものです。これは、外部の助成金である科学研究費の多くと同様に、計画された年次の中である程度計画的に使えば良いとのことですので、本当はもっと早く資料が入ってきて、ある程度資料の整理が進んでいる予定だったところが、コロナの関係で資料が入ってくること自体が12月、1月になってしまい、今年度予定していたお金の一部は、来年度に以降に持ち越すように計画の練り直しをしています。具体的な話になりましたが、事業の組み直しや予算のやりくりについては以上のようになっております。

**池田学芸主幹：**年度計画の記述にあたっての、中期目標・計画に沿った【ア】【イ】【ウ】の並びにつきまして、【ア】が重なっている場合には、段階的なものか、並行したものか、という質問であったと理解しております。基本的には、ここで書かれているものについては並行的に進めていくものになります。その中でも次年度重点的に進めていくものになると、格が上がって重点項目になっていくというものです。段階という言葉を考えて、博物館の時間の流れを考慮すると、来年度はこの項目はこのように実施するが、その次の年度はこうなる、ということを読み込んでいくことになります。

**大原会長：**ありがとうございました。議題3についてはこれでよろしいでしょうか。

#### **議題（4）第2期中期目標・計画期における協議会の役割（案）について**

**大原会長：**それでは議題（4）「第2期中期目標・計画期における協議会の役割（案）について」につきまして、説明をお願いします。

**池田学芸主幹：**お手元の資料3、資料4、資料5を使いながら説明いたします。

（以下、資料をもとに説明）

**大原会長：**ありがとうございました。私の方で一度整理をいたします。外部評価を出させていただいた後、博物館の方で今後の評価のあり方を検討していただいたということです。35のシートを16シートに変えていただいて、目標に対しての評価をしやすいといただきました。それから、毎年の内部評価を受けて、外部評価にあたる協議会評価を毎年するというように変えたいということです。課題ごとに見えづらかった研究評価を、目標を立てて課題評価をしやすい

構造に変えたということでした。

確認ですが、資料4の4ページにスケジュールが書かれてありますが、第2期中期目標・計画期と読み変えると、初年度は令和2年と考えてよろしいですね。そうすると、2年目が令和3年、3年目が令和4年、4年目が令和5年、5年目が令和6年になります。現在は、令和2年度（第2期中期目標・計画期の初年度）の2月に当たるということですね。今日の協議会では、来年度、令和3年度の年度計画（第2期中期目標・計画期の2年度目の計画）を見せていただいたところであります。今、ご説明いただいた新しい評価のやり方ですと、本来は、令和3年度の事前評価の報告が、今日のこの協議会で行われないとはいけなかったこととなります。しかし、今はその評価システムを作っている段階なので、それはまだできておらず、これからのことになるということですね。今年の7月に事後評価が内部評価（自己評価）として出て、9月に協議会のメンバーが協議会評価をやるということです。ですので、毎年9月に協議会評価をやって、令和7年に最終的な総合評価を行うということです。これまで（第1期中期目標・計画期）は中間評価と最終評価の2回の外部評価を行っていましたが、内部評価と外部評価を自己評価と協議会評価と読み替え毎年行い、これを5年分ためていくということによろしいでしょうか。

**池田学芸主幹：**はい、その通りでございます。補足ですが、今年度事業についてはこの新しい評価システムであると、昨年度に事前評価をしていなければいけなかった。しかし、システム構築ができていなかったため、今年度（令和2年度）事業の評価については、事後評価のみになると思います。それから今回ご提示している来年度の計画につきましては、今度の4月から組織体制が変わりますので、4月が過ぎた段階で新たな組織で早急に事前評価をはじめられればと思っています。

**大原会長：**評価をするスケジュールと構造はよろしいでしょうか。資料5の2枚目を見ていただくと、以前は北海道知事から協議会の委員に諮問がありました。諮問の内容は、北海道博物館の評価方法のあり方について考えてくださいと頼まれまして、次の年の平成28年にそのお答えをしました。その後、諮問もないまま、私たちが評価をするということで運用されてきました。その中で、委員の中から諮問と協議会のことをきちんとして下さいというお話がありました。結果的に、次の（令和3年9月からの第4期博物館協議会）委員に対しては、知事から博物館を毎年評価して下さい、5年後には総合評価をして下さい、というように博物館の応援団としての協議会にそのような諮問が出されるのではないかと思います。令和5年になるかと思いますが、第3期中期目標・計画も協議会として考えて下さいという諮問も出る。というように2つ諮問が出て、協議会の仕事をしていくという構造にしたい、ということで良いでしょうか。

**川田総務部長：**基本的にはそれでよろしいかと思います。今までは外部評価を受けた後に、次の中期目標・計画を作成していましたが、今後は、計画の作成に向けて、ご提言をいただきたいということになります。

**大原会長：**中期目標・計画を具体的に作るのは北海道博物館ですから、協議会はそれに対して提言やアドバイスをするという立場ということは、私も理解しています。それを踏まえてご質問、ご意見をお願いいたします。

#### 《質疑応答4》評価の形式について

**湯浅委員：**前年度の実績について翌年度に評価するということであると、最終年度だけは終わりにきいていないところで評価をするということでしょうか。

**池田学芸主幹：**第2期中期目標・計画期は令和6年度が最終年度です。令和6年度の評価については、令和7年度に行うこととなります。今まで（第1期中期目標・計画期の評価のしくみ）は、最終年度が終わっていないうちに最後の評価を行っていましたが、今後は、最終年度

が終わったあとに総括を行うようにしたいと考えています。

**湯浅委員：**わかりました。もう一つ確認です。健康値という指標については、事前評価でなされているいくつかの項目がありますが、それに基づいて、つまり資料4の2ページ目（1）

【ア】【イ】【ウ】【エ】に基づいて健康値が定められて、それから各年度の計画が定められたというように見ればよろしいでしょうか。

**池田学芸主幹：**そのようになっております。

**湯浅委員：**その場合、例えば重点的に何かがあったから、今回は中期目標の【ア】に注目して数値をそれまでより上げました、といったことを毎回ご説明いただけるということですね。

**池田学芸主幹：**健康値ですので、本来健康な状態のまま、毎年推移していくこととなります。それが変化した場合については、（評価調査の「前年度との主な変更点」などに）理由が明記されることとなります。またそれによって他の部分にしわ寄せが行かないかなど、博物館活動全体の中での事業の位置づけというのが、ガバナンス的にも目標管理的にも、評価の過程で書かれるべきことであると考えております。

**大原会長：**少し厄介なのが、協議会の委員の任期が2年ごとの更新で、4期まで再任が可能ということですが、中期目標・計画は5年単位で動き、協議会委員は2年単位ですので、ほとんど出来上がった段階で任期が終わっていきなくなり、新しい人が入ってくるなど、微妙な組み合わせになってしまっています。今後は、毎年評価を繰り返して、形を残すことで、委員が変わっても、次の人がしっかりと理解できるものを残すことができ、とても良い構造かもしれません。

何かほかにご意見ございますか。最終的に固まるのは少し先になりますが、協議会としてここで拝見したということになり、もし何か気がついたことがあれば後でご連絡することで問題ないでしょうか。

**池田学芸主幹：**この場で即決まるものではないので、ご意見あればご連絡いただければと思います。基本的に、最初の年度にいただいた答申の中で、北海道博物館の評価については、博物館による内部評価に加え、第三者による外部評価が必要である、と内部評価と外部評価のあり方についてお答えいただいておりますが、社会情勢に合わせて変更することができるという規定に基づいて今回このように変更させていただいたものになります。基本的にその時の諮問の精神を引き継いで、今回の会議を行なっているというようにご理解いただければ幸いです。

**大原会長：**疑問点があればご質問していただいて、さらに改善点等あれば個別にご連絡いただくということでもよろしいでしょうか。

### 《質疑応答5》北海道庁のガバナンスについて

**湯浅委員：**以前はガバナンスに対しては、北海道庁のガバナンスがどうか、ということでしたが、今回からは組織内部のガバナンスに着目するという点でもよろしいでしょうか。北海道庁のガバナンスは入ってくるのでしょうか。

**矢嶋文化振興課総括主査：**これから相談しながらになると思うのですが、やっていければと思っています。

**大原会長：**意図としては、私たちは北海道博物館と北海道庁との関係が健全なのかというのを外部の目から見て、他の都府県ではこのようなやり方がありますが、どうでしょうかという評価もしたいと思っています。それは館の中だけではなく、道庁の中での博物館のあり方も評価に入れると、より良い博物館のあり方になるのではないかという視点です。それはガバナンスも含めてであり、そうした項目の意見が委員からもあったので、ぜひその項目も残して欲しいということですね。よろしく願いいたします。

**池田学芸主幹：**それぞれの自己評価がありますので、その中で本庁と連携を取りつつ自己評価をしていければ、自ずとその関係が読み取れることになると思います。この辺については、文化振興課やアイヌ政策課と詰めさせていただきます。

大原会長：総合評価みたいところで自由なことが書けますので、その辺りは柔軟にということでもありますね。それでは議題4についてはこれで終わりにします。

#### 議題（5） その他

大原会長：次に、「その他」についてですが、委員のみなさま、もしくは事務局から何かございますか。

（質疑応答などなし）

#### 6 閉会

大原会長：それでは、すべての議題について協議を終えましたので、このあとの司会進行を博物館側にお返しいたします。

池田学芸主幹：今回をもちまして、現在第3期目となります委員のみなさまの任期における協議会は終了となります。第3期の協議会が終了となるにあたり、最後に当館館長石森秀三より、一言ごあいさつをさせていただきたく思います。

石森館長：（ごあいさつ）

池田学芸主幹：それでは、これもちまして、本日の協議会を終了させていただきます。長時間にわたり、ご審議いただき、ありがとうございました。